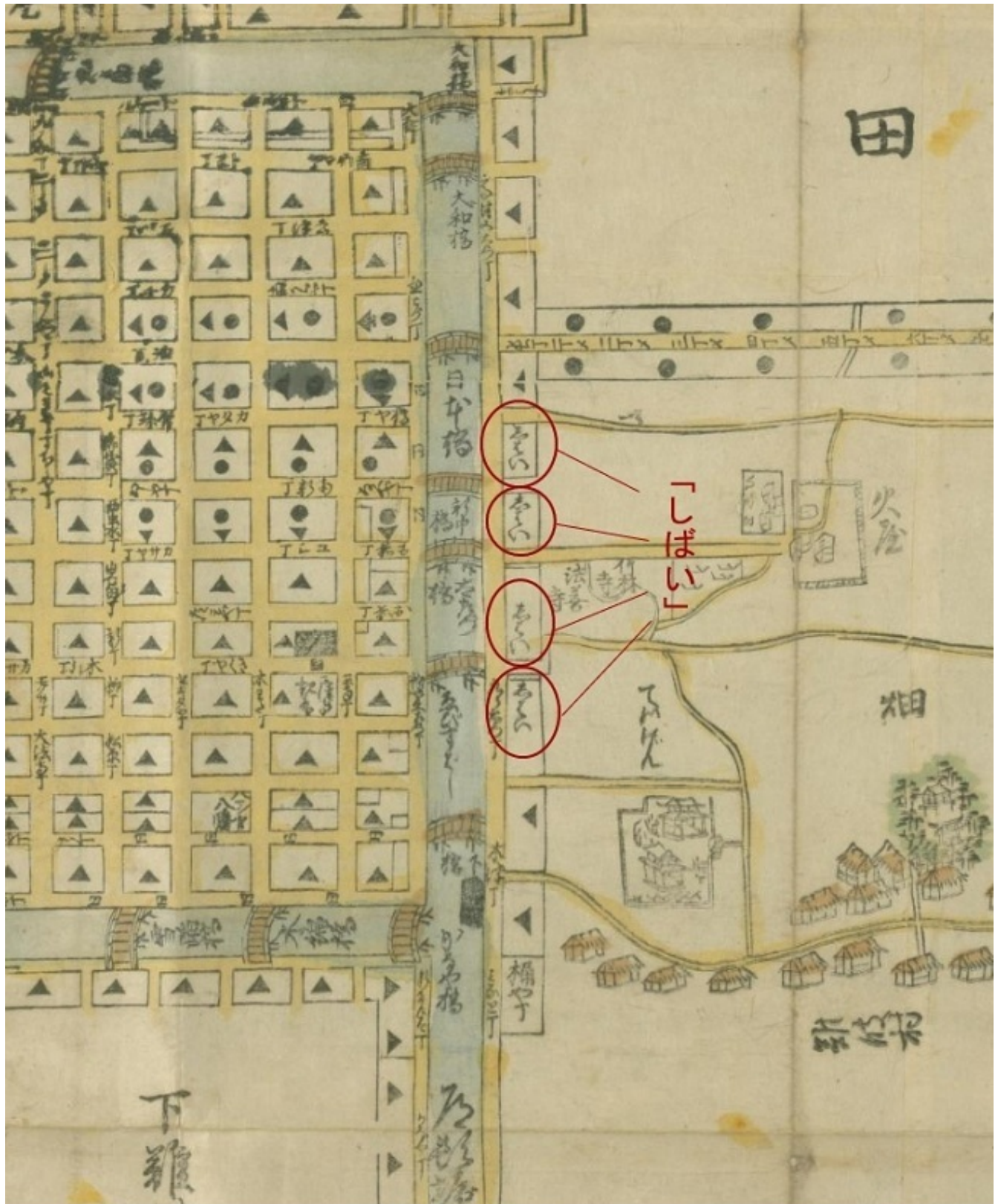




みずのみやご大坂

(三) 道頓堀



「大坂大絵図」(国立国会図書館蔵・元禄9 [1696]年)より

江戸初期の絵図に見える道頓堀(中央)

「しばい」の文字が芝居小屋を表しています





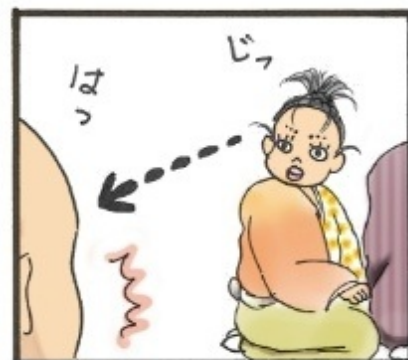
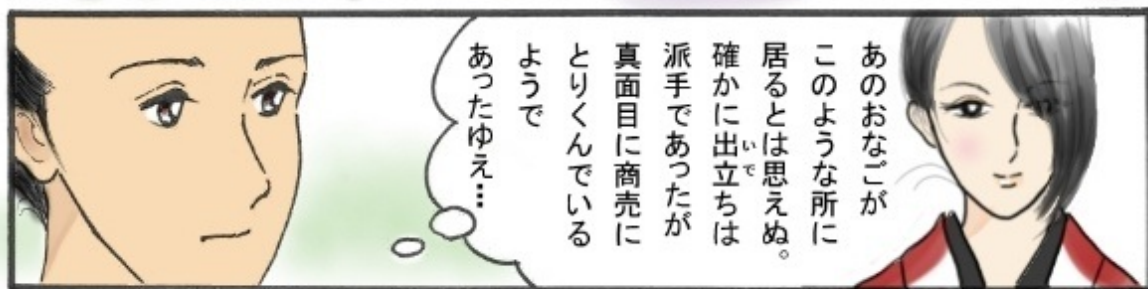




(1) 歌舞伎の原型は、出雲の阿国おくにが京で始めて大流行させた歌舞伎踊りとされています。その後、阿国の真似をした遊女歌舞伎が流行りますが、風紀の乱れを理由に寛永6年(1629年)に禁止されます。その後は、元服前の少年=若衆が演じる若衆歌舞伎が盛んになりますが、若衆をめぐる殺傷事件などが起こったため、こちらも承応元年(1652年)に幕府によって禁止されます。以後、成人男性が女形を演じる野郎歌舞伎が始まり、現在まで継承される形となりました。







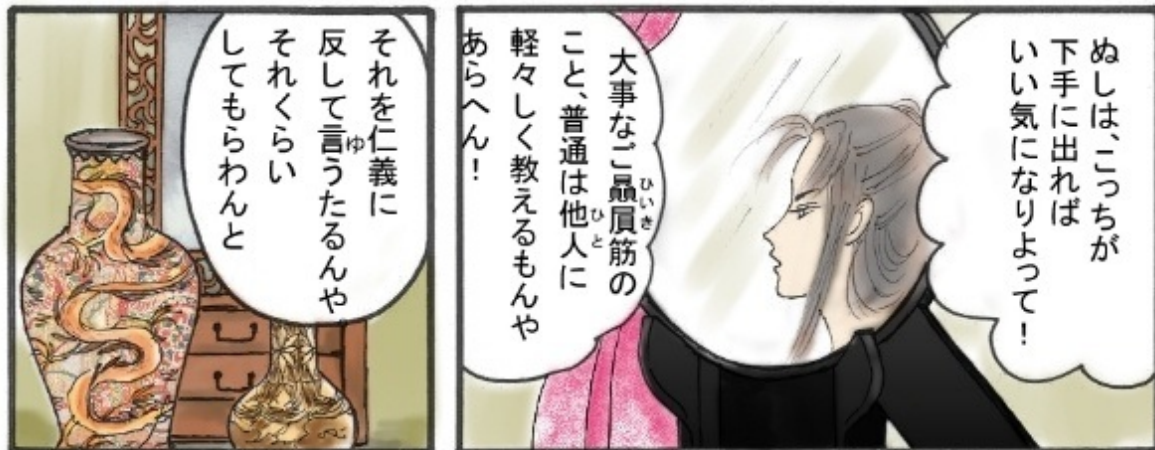








(2) よく知らない人に恋すること









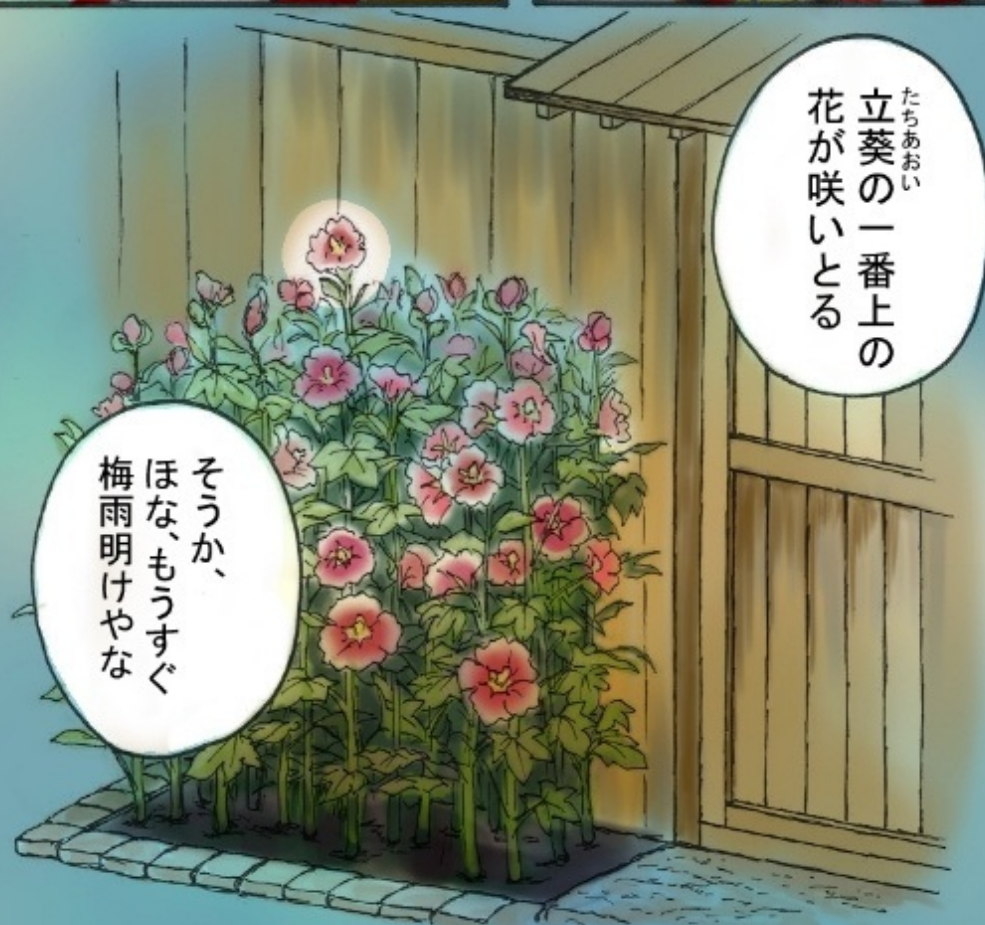












コラム3

義を重んじた歌舞伎若衆(わかしゅ)

～道頓堀に咲いた美しい華～



戦国時代がお好きな方なら、その時代、今の我々の想像をはるかに超えて男色が盛んであったことをご存知でしょう。

同性愛は、現代では倒錯した異常な性愛、または特殊な嗜好だと考えられますが、昔は女色と男色の区別が曖昧で、男性は男とも女とも関係を持ち、男色はごく一般的なものだった（！）のだそうです[※1]。

かなり驚きの事実ですが、同性愛を異常とするのは西欧のキリスト教的倫理観が導入されてからで、私たち日本人の価値観は150年ほど前の明治維新の時にかなり変わったと言えるでしょう。

大坂が生んだ大ベストセラー作家 井原西鶴の「男色大鑑(なんしょくおおかがみ)」(1687年刊行)は全八巻からなり、武家、町人、歌舞伎若衆、僧侶といった様々な階級の男色家の物語を多数の短編で綴っています。

巻八の最後には

「この道(男色)は作者のみの関心事ではなく、インド・中国・日本の三国に広まる遊びである。インドでは非道と呼ぶのは滑稽だが、中国ではアセンという名の戯れごとで、日本では衆道(しゅどう)と言ってたいへん盛んである」[※2]

との記述があります。

日本では特に男色が盛んですよ、と言っているのです。

その時代の人言葉ですから、信じないわけにはいきません。

しかも西鶴は、男同士の愛には徳があり、女色よりも男色の方が優位だと説いているのです。

西鶴は、若くして死別していますが妻を持ち、子供もいる身でした。しかも超有名人。

そういう人が堂々と男色を語って賛美する、というところからも、広く社会に受け入れられていたことが想像できます。

西鶴の代表作「好色一代男」の主人公世之介も、女性のみならずあまたの男性とも関係を結んでいます。

ちなみに男色を意味する「衆道」という言葉は「若衆道」を略したものです。

マンガの時代設定は寛永時代（1624～1643年）。この頃は遊女歌舞伎が禁止されていて、正に若衆歌舞伎が全盛期でした。

戦国気風がまだまだ色濃く残るこの時期。

見目麗しい少年たちが華麗な振袖に身を包み、薄化粧をして舞い歌い、そして芝居がはねればお客の相手をする。道頓堀はそんな営みが日々繰り返される場所でした。



現在の太左衛門橋 昭和まで木造のまま残った橋なので、現在でも木造の外観が施されています

激しい愛に義で応える松島半弥

さて、「男色大鑑」の半分、後半四巻は歌舞伎若衆の様々な愛の物語が綴られています。

当時人気のあった実在の歌舞伎若衆が多数登場し、事実なのか西鶴の創作なのかは不明ですが、あながち現実からかけ離れた空想とは言えないでしょう。

というのも、西鶴は儒教に則した精神美がある男色を取り上げ賛美しているからです。これは当時の価値観に適い、一般に認められていた行動規範だと考えられるからです。

その中の一つ、巻七の二「女方もすなる土佐日記」に出てくる松島半弥は、芝居の真っ最中に彼を熱く慕う男に告白されます。田舎者風のその男は、突然舞台に上がり、自分の深い恋心のしるしとして左の小指を切り落とし、紙に包んで投げ出します。

半弥は少しも動揺することなく、

「お気持ち、あだにはいたしません。今は芝居の最中ですので、とりあえず楽屋へ」とその場を収め、投げ出された男の小指を大事に懐に入れます。

見ていた人々もそんな半弥にいたく感心。

また、半弥は男に「我が宿にぜひお尋ねください」と甘美な誘いをかけます。

そしてその晩は家に帰り床を取って、袖に香を焚き染め、男が来るのを待っていました。



「男色大鑑」巻七の二「女方もすなる土佐日記」挿絵（国立国会図書館蔵）

なんという激しさ、なんという美しさ。

今だったら、勝手にやってきて、勝手に指切って、一体何？となるところでしょうが、昔の人はそんなことより、思いの一途さに価値をおいたのですね。

その一途さにしっかりと応える、これが儒教の徳目、仁・義・礼・智・信のうち、義を重んじた愛と考えられていたのです。

ちなみに、小指を切って嘘いつわりのない心を示すという方法は、古代中国を描いたドラマでも見たことがあります。 痛みに耐えても自分の体の一部を差し出して、決して裏切らないことを表していました。

吉原などの遊女またはその相手も、お互いの心をつなぎとめるために、小指の第一関節から先を切って相手にあげたそうです。が、実際に切った人は少数だったようです。やっぱり相当痛そうだからね。

そのうち指を切るという方法のうわべだけが独り歩きして、死体からとってきた指や本物そっくりの偽物が出回って使われたそうです。

こうなると誠意や義はふっとんで、騙し合いの世界になってしまいますが。

今でも約束事をするときは

「指切り、拳万、嘘ついたら針千本の一ます」

といって小指をからめあいますが、この「指切り」は、実はこの小指切りから来ているのですよう。ちょっと怖いですね。((+_+))

さて、男色大鏡の話に戻しましょう。

半弥の他にも、たくさんの歌舞伎若衆が、一途に自分を想ってくれる人に対して律儀に報いようとしています。

平井しづまという若衆は、七十過ぎの老人でも自分に恋すると聞けば逢瀬に出かけていき、老人から「実はあなたを慕うのは私の息子です」と言われ、では息子さんと、と承諾。ところが出てきたのはしづまを狂おしいまでに恋する娘でした。なんと、それでもしづまはOKして娘と一夜を共にしたのでした。

玉川干之丞は、かつての恋人が零落して五条河原で乞食となっていることを聞きつけると、必死に探し出し、寒さをしのぐための酒をふるまい、足をさすってあげます。しかし相手はすっかり落ちぶれているため、干之丞のことが思い出せなかったのか、姿を消してしまいます。干之丞は悲しみ、再び都中を探し回ったのでした。

ある男が、玉村吉弥を一目見て惚れ込み、吉弥に逢うために佐渡島まで渡ってお金を稼ぐなど苦勞を重ねました。吉弥はその愛に応え、男に真心を捧げたのでした。

などなど、「男色大鑑」の世界にどっぷり浸かってしまいそうです。

遅ればせながら、若衆とは、十代のまだ前髪を切り落としていない元服前の少年のことです。そのような少年たちの中にもしっかりと儒教の教えが浸透し、それが男色と両立しているところが、私たち現代人の理解を超えたところですね。

単に情にほだされて、というのではなく、最後まで義を貫き通しているところがこの時代の凄さであり、面白いところなのです。



さて、そんな義に厚かった若衆達を思い、今の道頓堀を歩いてみると...

ご存知のとおり、とにかく賑やかで、太左衛門橋のもとでゆっくり物語の思索、なんてことはできません。(^ _ ^)

大きなカニや



えびす様や



グリコの走る人



いやまあ、すごい、すごい。

しかし、そんな賑々しい中にも、ちゃんとあります。

しばし喧騒から離れて、歌舞伎若衆の残り香を感じることができる、そんな場所が。



このように、とっても素敵なエントランス。

法善寺横丁、水掛不動さんの目の前にある美術館、上方浮世絵館です。

江戸後期から幕末、明治初期にかけて描かれた、道頓堀の役者絵を展示してあります。

かつて人々が芝居を愛したこの地で、大坂の浮世絵を伝えていきたいという思いで造られた私設の美術館です。

展示してある役者絵は、3代目中村歌右衛門や7代目片岡仁左衛門など、江戸後期の人気役者のものです。

若衆歌舞伎が禁止され、野郎歌舞伎となってから久しい時代のものですが、それでも私は女形の姿の中に歌舞伎若衆の息遣いを感じます。

心尽くしの衣装と魅せる所作、その中から、「観る人を楽しませよう、期待に応えよう」という若衆と同じ心意気が伝わってくるのです。

道頓堀は、賑やかに遊んでもよし、歴史に思いを馳せてしっとりとたたずんでもよし。
その魅力ゆえ、何度も訪れてしまいます。



2012年12月27日

まんがもコラムも第4話につづきます

引用文献

[※1] 「少年美と男色における美意識について - 『男色大鑑』 卷三の四「薬はきかぬ房枕」を通して - 」 鈴木明日美著 長野県短期大学日本語日本文学会(2007)

[※2] 「大阪暮らしむかし案内 絵解き井原西鶴」 本渡章著 創元社（2012年） p229

参考文献

「『男色大鑑』一若衆歌舞伎の世界」 白倉一由著 山梨英和短期大学紀要（1985-02-28）
「シンポジウム 性の日本史」 氏家幹人他 雑誌「現代」 講談社（1995年11月号）

みずのみやこ大坂(3)

<http://p.booklog.jp/book/63252>

著者：新崎衣南未

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/inami-n/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/63252>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/63252>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ